

(六) 東区とうそじんの道祖神でんやお(伝八はつびやく百比丘尼びく)石像せきぞう

町文化財 平成二十六年十月指定

東伊豆町の各地には、石造りの神様の像がまつられています。この神様は、道祖神や塞さいの神とよばれています。村の境さかいなどで外から悪いものが入らないようにまつられていました。が、やがていろいろな願いごとが祈られるようになりました。

東区道祖神の三体のうち、真ん中の石像は手に椿つばきを持っているといわれています。今ではよくわかりませんが、この石像の昭和初期の写真が民俗学者である折口信夫博士の著書『古代研究』国文学篇こくぶんがくへんに載っています。折口博士は、この石像が手に椿をもつことから八百比丘尼の石像であるといっています。

八百比丘尼とは、長生きをした尼僧にそう(女性のお坊さん)のことであり、次のような伝説があります。昔、不老長寿ふろうちようじゆの薬とされる人魚の肉を誤って食べた娘が、いつまでも歳としをと

らず、長生きをしました。夫おつとをはじめ多くの家族を亡くした娘は、亡くなった夫や家族を弔とむらうために尼僧となり、各地に椿を植えたと伝えられています。

伊豆の東海岸の道祖神は、石から一体の石像を丸ごと彫り出す「伊豆型道祖神」といわれるめずらしいものです。この石像は、そのなかでも他に同じような形のない大変めずらしいものです。

